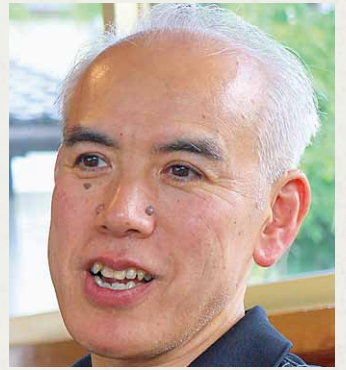


発掘! さわめびと

戦国時代の鎧・兜作りに取り組み、今、4代目を制作中の武具づくりの達人。



つちや つぎ お 土屋 次男 さん

1960年小諸市生まれ。結婚後の93年、川上村から佐久穂町に移り住む。新聞記事を見たことがきっかけで2014年から上田城甲冑隊に参加し、武具づくりに取り組む。小諸に墓のある武田信繁には以前から興味があったが、上田城甲冑隊に入ってから、「より戦国時代や武将が好きになりました」。今年から上田城甲冑隊副隊長。家族は「武具づくりに関しては何のコメントも口出しもしない(笑)」奥さんと2人。

「時代劇を見ていると、鎧、兜が出てくると、あ、この鎧、いいなあとかね。鎧が出てくると、そればかり見ちゃって、話の中身が入ってこないんですよ(笑)」

土

屋次男さんが属しているのは「上田城甲冑隊」(隊員数三十四人。うち女性九人)。鎧、兜など武具一式を自分たちで作り、それを身につけて、お祭りなどのイベントに参加して、観光客をもてなすというのが甲冑隊の目的だ(真田家の歴史を勉強するというもう一つの目的もある)。

会社から戻って夕食を食べ終えると、土屋さんは武具づくりにとりかかる。いま取り組んでいるのは、初代から数えて四代目の鎧と兜。兜は、小・中学生が登下校時にかぶるヘルメットに細工や塗装をほどこしてつくる。胴は初代、二代目と厚紙を使ったが、三代目からは鉄板でつくるようになった。鉄板を使おうと思ったのは、紙は雨に弱いから。

「天候に左右されるというのはやっぱりまずいかな、と。それと、紙じゃ物足りないんですよ。じゃあ、鉄板でつくろうと」鉄板は、勤めている会社(トランスメーカー)から出る廃物を再利用している。

「鉄板だと穴開けだとか、曲げが大変なんですけど、出来上がると、やはり全然違いますね」車の下回りの塗料で真っ黒に塗装された胴は重量感と、いかにも鎧らしい手触り感があった、本物と見紛うほどだ。

「真田祭りのエキストラ募集。武者行列に甲冑の正装をして参加しませんか?」——土屋さんが武具づくりをするきっかけとなった五年前の新聞記事だ。これを見た土屋さんは「一度くらい出してみようかな」という軽い気持ちで応募する。戦国時代、

とくに真田家にはもともと興味があった。しかし、イベント当日、現場に行くと、期待は一気にしぼむ。

「スタッフの人たちが武具を着せてくれるんですけど、それが足軽の格好だったんですよ。頭には中華鍋みたいなのをかぶらされてね(笑)。これは希望したのと違うなあ、と(笑)」

隣を見れば、鎧、兜に身を固めた、颯爽とした武将がいた。

「あー、いいなあと思って見ていたら、その人が自分で鎧、兜をつくったって言うんですね」

聞けば、上田城甲冑隊の隊員だという。甲冑隊の存在はその前から知っていたが、鎧、兜を自分でつくれるというのが惹かれた。隊員募集に応募したのはそれからまもなくのことだった。

入った当初は、先輩隊員の手ほどきを受けたが、自動車の板金塗装の経験もある土屋さんにとって、紙でつくる鎧は、それほどむずかしいものではなかった。そして、半年ほどをかけて、初代の鎧、兜が完成。二〇一四年のことだ。

「武具づくりの魅力? むずかしいところをどうやってつくりうか、頭を絞るところでしょうね」

しばらくすると、教えられる側から教える側に回った。



真田家のトレードマークである「赤備」に身を固めた土屋さん。頭から爪先まで全部手作りだ(=上田城)。

人観光客の気も高い。上田城にやってくる外国人観光客と一緒に写真を撮ってトリクエストされることはしばしばだが、親交のある大阪赤備隊とのジョイントで大阪城に行くこと、すぐに外国人観光客に囲まれて、長い列ができてしまうという。

「お客さんすべてを相手にしていたら、帰れなくなっちゃうんで、赤備隊の仲間たちがお客さんを引きつけてくれる間に、サッと引き上げてきます」

イベント後の仲間との話題はやはり武具のこと、そして戦国時代の話が中心になるといえる。ただ、武具づくりに熱中するあまり困った(?) ことも。

「時代劇を見ていると、鎧、兜が出てくると、あ、この鎧いいなあとかね。鎧、兜が出てくると、そればかり見ちゃって、話の中身が入ってこないんですよ(笑)」

シヨックだったのは二年前。「孫娘(当時四歳)に陣羽織をつくらせてあげたら、『やだ!』って。せつかくの陣羽織を(笑)」